

# 洛友会会報

京都大学工学部電気系教室内  
洛友会  
〒606-8501  
京都市左京区吉田本町  
075-753-5270  
www.rakuyukai.org

## 時には反省

洛友会会長 松本 紘



なっている事を経験してきました。何もせず、ボーっとした時間を作り出し、何をしてきたか、何をしているのか、何をしようとしているのかなど、ボーっと考える時間を持ちたいものです。

新年おめでとうございます。時間は連続して流れてゆきますが、節目節目に我身を振り返ることが必要でしょう。「忙しい」ということを理由に考えること、反省することをやめていることはよくありません。私自身もよくありました。多忙は心を失うことが多い、ということでしょうか。「忙しいから」という理由で物事を考えることをしないのは、やはりまずいでしょうね。私自身も多忙な時程、時間だけが過ぎゆき、心が空に

は短いなど感じる事が増えました。仕事は自分だけではどうにもならない事も多いでしょうが、どうにかしようという気がなければ、何も変わらず、気がつくが遅いということも多いというのが世間の実情ではないでしょうか。月に一度くらいは、己の人生を考えるとできれば、どんなに素晴らしいだろうと今頃になって私自身を感じています。

考えてみませんか。仕事、家庭、社会、時代の中の人生を有意義に過ごせるよう、それぞれが少しの時間を無駄にして考えましょう。失敗も成功も有意義だと思えますが、無駄そうな時間を作り出す楽しみを作ってみませんか。



## 迎春

二〇二四年一月一日

### 本部役員

顧問 問荒木光彦  
会長 松本紘  
副会長 福田隆

### 支部長

北海道 木元伸一  
東北 伊藤篤  
東京 平川明  
北陸 笠原禎也  
中部 小森憲昭  
関西 高野登志裕  
四国 小嶋唯司  
中国 前田耕一  
九州 能見和司

### 本部幹事

北野正雄  
和田修己  
和田進  
萩原朋道  
松尾哲司  
佐藤高史

# 東北支部の起こり

東北支部長 伊藤 篤 (平元年卒)



明けましておめでとうござい  
ます。

さて、新年早々困りました。巻頭言！うーむ、何を書いてよいやら。平成元年卒も還暦が射程距離内に入りましたが、未だに大した見識も備わっておりません。仕事で日々、売り上げを立てることに汲々とする毎日を送っているだけで、巻頭言に相応しい立派な材料など全く持ち合わせておりません。いやはや本当に困りました。申し遅れました。令和4年度から東北支部長を務めております、おそらく電子工学科卒業の伊藤篤と申します。生まれも育ちも宮城県であり、東北地方を出たのは、学生時代の4年間と海外駐在した3年間のみという根っからの東北

人です。

さて、高校生当時の私にとつて、仙台から遠く離れた京都大学に進学することは、パスポートの要らない留学をするような気分でした。宮城県とは明らかに異なる方言、習慣、自然環境、食べ物の数々に、ワクワクしながら学生生活を送っていたことが思い出されません。まず、それまで聞いたこともない蟬の鳴き声に驚きました。「ワシワシワシワシ・・・」と暑苦しいクマゼミは東北では生息していません。また、数多くの銭湯にも大変世話になりました。銭湯は東北では既に珍しい存在となっており、京都は何でこんなにも多いのかと不思議でした。4年間の留学を終えて宮城県に戻り、社会人生活をスタートしましたが、その翌年には結婚し、新婚旅行で研究室を訪問して、恩師の板谷先生や、まだ研究室に在籍していた先輩方や同期に夫婦揃って挨拶したことを懐かしく思い出します。遠い遠い昔の記憶です。

私と洛友会活動の関りは、社会人になって間もなくのことです。

社の先輩から東北支部総会に誘われたのが始まりです。生粋の東北人が加入するのは大変久しぶりのことであり、既に会員が減るばかりの東北支部にとって、私のような新人は大変貴重だったと思います。ひよっとしたら、幹事を引き継ぐ格好のカモ登場といった側面もあったのかもしれませんが。ただ私には、同窓会組織があることが意外でした。京都大学は群れない学風との理解だったためです。実は他と変わらないものなのかと、ややがっかりしたと記憶しています。

その支部活動といっても、年に一度の総会に出席し、本部の方から最近の京都の動向を伺ったり、会員相互の親睦を深めるだけで、年々会員の高齢化は進み、新会員が入らず、総会参加者は減少の一途となりました。万年幹事の役目にもそろそろ飽きてきた頃、海外赴任のため支部活動から離れられた期間があり、これ幸いと東北支部から抜けようと思いましたが、帰任するとすぐに見つかり、また幹事に戻されてしまったのです。そして35年が過ぎ、とうとう支部から人材が枯渇し、小生が支部長を拜命するに至りました。新人が全く入らない、東北へ転勤者が来ても定住しないのですから仕方ありません。内緒ではありますが、支

部長の任に加えて、未だに幹事も兼務しております。

東北支部の設立は記録によると昭和41年。ところで、なぜ京都から遠く離れた土地に東北支部があるのか。きっかけは、東北電力の社長に京都出身で元関西電力副社長の平井寛一郎氏が就任したことに始まるようです。東北に洛友会の支部がないのは、おかしいやないか、との平井氏の鶴の一声で設立が決まったと伝わっております。設立総会は当時電力ビルにあり、皇族もお泊りになったグラントホテルにて、本部から鳥養利三郎先生、林重憲先生、山本茂雄先生をお招きし、平井氏を初代支部長として支部から14名の会員が出席して華やかに開催されました。昭和40年代当時の支部総会では、講話の時間が設けられておりました。「宇宙通信と宇宙開発」「計算機技術と計算センターの動向」「核融合プラズマの現状」といった、先進的なテーマで講話が行われ、それをもとに、会員間で議論が進められていたようです。余談ですが、今やすっかり一般化している太陽光発電ですが、昭和33年に国内で初めて実用化したのは東北電力です。ついでに、国産の四輪駆動乗用車のきっかけも東北電力だそうです。当時の東北は先進的でした。

# 迎春

二〇二四年一月一日

公益財団法人

## 京都技術科学センター

理事長 田中 一義

副理事長 山田 啓文

公益財団法人

## 応用科学研究所

## 田中プリント



平井氏は京都に戻らず東北に最後まで残り、東北電力の社長、そして会長として東北新幹線開通など東北地方の発展に尽力されました。支部長を昭和51年まで務められ、そして昭和53年に永眠されました。

そのような偉大な先達が形作った東北支部ですが、これからどうなっていくのでしょうか。日本経済の停滞、高齢化、少子化の問題が東北支部にも重く押し掛かっている、と言ったら大げさでしょうか。何しろ人材の供給が無いのです。仙台〜東京間が新幹線で1時間30分と時間的距離は各段に縮まりましたが、東北から京都大学を志望する高校生は、今でもかなり珍しい存在でしょう。逆に経済が芳しくない状況では、進学先の選択肢として京大が除外されるケースが増えてくるかもしれません。何しろ東北にも魅力的な大学はありますから。

社人として移住してくるのはどうでしょうか。バブル期までは、東北に多くの工場が進出していました。これからは東北の時代だと言われ、都市開発がすすめられたり、事業所が置かれて人の交流が進んだ時期もありました。他支部から東北支部へ、会員の流入が期待できたかもしれません。しかし、今は東京一極集中であり、このよ

うな流入もあまり期待できない状況です。人口も減っていきま。私が最後の東北支部長になるかも、という考えがよぎることもしょっちゅうあります。しかし、何も悲観はしていません。東北支部を存続させることが洛友会活動の目的ではないのですから。京大で学んだという事実は個人々人から消えることはないですし、そもそも、群れることをよしとする学風でもないはず。役目を終えた組織がひっそりと消えていくのも、それはそれで美しいはずです。

さて、令和4年春、久しぶりに京都の町を訪れました。CI G R Eのシンポジウムが京都国際会館で開催され、その分科会の進行役を務めるためです。コロナ禍のため、残念ながら海外からの参加者はすべてオンラインとなりました。実は昨今のインバウンド、オー

バーツーリズム問題のため、しばらく足が遠のいていたからです。新婚旅行で改めて訪れるほど気に入っていた京都の町ですが、どこかすっきり変わり果ててしまったような気がしていました。それが今回は、かつての落ち着きを取り戻して、どこか懐かしく、うれしい気持ちになりました。会館隣に建つ楕円形の建物が特徴の

ホテルは健在で、35年前に新婚旅行で宿泊した当時のままでした。銀閣寺近くの下宿はまだ残っていましたが、今は誰も住んでいないようです。毎日通った近所の銭湯は跡形もなく、銀閣寺キャンデーの店も廃業してしばらく経っていました。夜はどうしても銭湯に入りたくて、錦市場の「錦湯」に浸かりました。その錦湯も程なくして廃業の知らせが届きました。

支部長の任期中は、本部総会出席のため京都を訪れる機会が増えるでしょう。肩肘張らず、重苦しく考えず、たった一人からでも会員から反応がある限り、京都本部と東北をつなぐ小さなハブ機能として東北支部を維持していきたいと思えます。

教室だより

令和5年度電気系教室

懇話会報告

令和5年度電気系懇話会が教員、学生、卒業生他80名以上の参加を得て、11月24日(金)に開催された。

今年度は新型コロナウイルス感染症の位置付けが5類に変わったことを受けて、電気総合館大講義

室において対面での実施となった。はじめに司会の松尾哲司学科長が講演会に先立って挨拶をされた。

その後、講師をお願いした松重和美名誉教授と森望氏(昭61年卒)のお二方により、非常に興味深い講演をいただいた。ご講演の概要は以下のとおりである。

「京都からのイノベーションの創出ーEV・分子エレとベンチャー育成・産学公連携ー」

松重 和美名誉教授



京都大学名誉教授の松重和美先生にご講演頂いた。

松重和美先生は九州大学理学部物理学科のご出身で、米国ケース・ウェスタン・リザーブ大学工学研究科高分子科学専攻Ph.D.課程を修了され、九州大学工学部助手・助教、教授を経て、1993年に京都大学大学院工学研究科電子工学専攻に教授として

着任された。2012年にご退職されるまで、有機分子エレクトロニクスや電気自動車にかかわる先駆的研究を推進され、また京都大学ベンチャー・ビジネス・ラボラトリー施設長、産学連携・知財担当の京都大学副学長等を歴任され、イノベーションに積極的に取り組まれた。2013年より四国大学学長を務められている。

ご講演では、九州の箱崎神宮浜の砂を防振に使用してSTMを自作され、分子や原子を直接観測されたことを始まりとして、有機強誘電体をSTM・AFMで操作して高密度メモリーに応用する研究へ展開されたこと、分子コンピュータや折り畳み可能なディスプレイの先駆けとなるご提案をされたこと、そしてこれらの流れが現在の有機ELディスプレイなどにつながっていることなどを紹介いただいた。

続いて産学連携の仕組みを京都大学に定着させるために努力されたことや、国際融合創造センター、複数企業と複数研究室からなる研究体制である包括的融合アライアンス、京都地域の企業と大学の連携関係を築くための知的クラスタープロジェクト等々の先進的な取り組みを率いて来られたことをご説明頂いた。さらに、ご自身が中心となって

### 電気事業の現状と

#### 当社の取組み

森 望 氏

(関西電力株式会社)

取締役代表執行役社長・昭61年卒)



立ち上げられたベンチャー・ビジネス・ラボラトリーにまつわる様々な出来事を熱く語っていただいた。建物・設備だけでなくベンチャー精神を涵養するための講義を立ち上げられ、また様々なコンテストやインキュベーション施設の整備などを通してベンチャービジネス立ち上げの支援を行われた。そして、これらの支援が、リポセル、京都インスツルメンツ、メトリサイエンス、Pirus W等の電気系出身者による起業も含む20〜30社のベンチャーの立ち上げに繋がっていったとのことで、大変感銘深いお話しであった。

そして先生ご自身も教育・研究・趣味において、現在も新しいことに取り組みされており、在学生もぜひ強い情熱をもって、これからの世界を切り拓いて行って欲しいという熱いメッセージをもってご講演を締めくくられた。



2020年から再生可能エネルギー事業部長、地域エネルギー本部長を歴任され、2022年から取締役・代表執行役社長を務められている。

講演では、日本最初の電灯であるアーク等の電源がボルト電池であったところから話を始められ、その後、電気事業が発展し、京都の琵琶湖疎水に今でも残る蹴上発電所ができたこと、その時期に導入された発電機の違いから西と東で60Hzと50Hzの違いができてしまい、特に東日本震災後、東西の電力融通の点で周波数変換の容量が問題になっているというご説明をいただいた。

また初期の電力事業はさまざまな会社が存在する群雄割拠的な状況であったが、その後、9電力体制となり、昭和26年から西暦2000年まではそれぞれのエリアにおいて垂直一貫体制で発電から送電までを担い、さらにその後、電力事業再編などで状況は変わりつつあるが、電気事業の基本的価値は安定性、経済性、環境性にあることに変わりはないとのことであった。

日本のエネルギー自給率は最新のデータでも13%であり、食料自給率の40%と比べても小さく、また島国である日本ではヨーロッパの国々のように国家間での電力の

補完もできないため、日本にとつて自らエネルギーをどう確保するかということが改めて重視されているとのことである。その中で、再生可能エネルギー、原子力エネルギー、火力エネルギーのそれぞれがもつ利点や課題を考えつつ、エネルギーのベストミックスを目指す必要がある、国の目標は再生エネルギー三十数%、原子力二十数%、残りを火力で賄うという計画であるということをご説明いただいた。

今後は脱炭素とエネルギー安全保障を両立させていくことが重要となる。脱炭素に関しては電力以外の産業やエネルギー利用も含めた対策が必要であり、化石燃料を直接使う動力等の置き換えにより電力需要が増していくことも考えられる。また石油火力発電所等は廃止する動きが進んでいるが、それに見合うだけの再生可能エネルギーあるいは原子力エネルギーが確保できるのかどうかはまだ不透明な部分もある。原子力発電所の寿命を考えると、今後新しい原子力発電所を準備していく必要がある、メーカーとも協力して検討を進めている。再生可能エネルギーに関しても増加しつつあるが変動性が課題であり、九州電力エリアでは太陽光発電の抑制要請が出る日数が多くなりつつあり、広域連携

のための設備の増強なども検討されている点などについてご説明いただいた。

今後は、ユーザー側に分散型の再生エネルギー源や蓄電池がますます導入されていき、電力の流れが大きく変わり、また水素等の電力にも電力以外のエネルギー源としても使える技術も発展してくるが、これらをうまく組み合わせ活用していくことをユーザーとも一緒に考えていく必要があるというメッセージをもって講演を終えられた。

講演後は森様にご質問をする機会が設けられ、原子力発電の使用済み燃料の処理についての活発な質疑応答が行われた。

講演会終了後、百周年時計台記念館2階国際交流ホールにて「懇話会」および「先輩と学生との交流会」の合同での懇親会が行われた。松尾哲司学科長が開始の挨拶をされ、150名以上が参加する盛況な雰囲気の中で賑やかに歓談が行われた。萩原朋道洛友会事務局長に締めめの挨拶をいただき、名残を惜しみつつも時間の関係で解散した。



◎退職記念行事のご案内

令和6年3月31日付で、引原隆士教授が定年退職されます。左記の通り、最終講義を開催いたしますので、ご案内申し上げます。

引原隆士教授

最終講義のご案内

日時：令和6年3月13日（水）

午後3時00分

午後5時00分

場所：ハイブリッド開催（オンライン配信と学内閣

係者を対象とした対面

開催の併用）

題目：「アナリスからシン

セシスへー研究と支援

の相補性」

詳細はホームページを閲覧下さ

https://www-lab23.kuee.

kyoto-u.ac.jp/ja/index.

php?FarewellLecture



連絡先：薄 良彦 准教授

Tel：075-3383-2239

e-mail：farewelllecture@dove.

kuee.kyoto-u.ac.jp

会員寄稿

オーディオ・映像分野の  
思い出の電子機器

吉本 浩二

（平5年修・四国支部）



私は1960年代後半の生まれで、平成5年に修士課程を修了し、生まれ育った四国の企業に就職しました。今回の寄稿では、主に中学～大学時代（80年代～90年代前半）に出会った、オーディオや映像分野の思い出の電子機器をご紹介します。

（一）アナログオーディオ時代の  
思い出の機器

私の小学～中学時代（70年代～80年代前半）は、アナログのレコーダやカセットテープが中心の時代でした。

当時のアナログ機器においては、モーターの回転が安定しないことにより発生する周波数変化であるワウ・フラッターが重要な指標でした。人間の耳は周波数の変

動に敏感であり、その変動は再生音の質に大きく関係します。

私の記憶に強く残っているレ

コードプレイヤーは、主に中学時代に使っていたプレイヤーです。

当時としては画期的なレコード

ジャケットサイズで、日本のグッ

ドデザイン賞を受賞し、ニュー

ヨーク近代美術館にも永久収蔵さ

れている製品です。レコードプレ

イヤーは、1分間に33 1/3回

転、もしくは45回転と遅い回転数

を維持したまま、高い回転精度を

実現する必要があり、ここが技術

的に難しい点となります。このプ

レイヤーは、ターンテーブルの駆

動部がモーターのローターとター

ンテーブルが一体化した構造のダ

イレクトドライブ駆動方式となっ

ており、良好なワウ・フラッター

値を実現していました。また、こ

のプレイヤーはスイングアーム方

式のトーンアームではなく、ト

ンアームが外周から内周に向けて

直線的に平行移動するリニアト

ラッキング方式のトーンアームを

採用しており、トラッキングエン

ジャーをかなり低い値に抑えていま

した。

最近では世界的にもアナログレ

コードの人氣が高まっているよう

で、現代のカッティング技術やプ

レス技術を使って、アナログレ

コードを復刻したり、新曲をリ

リースする際にCDとアナログレコードを同時発売したりする流れがあります。

カセットデッキで思い出に残っているのは、中学～高校時代に愛

用したカセットデッキです。この

カセットデッキは、操作ボタンの

レイアウトが個性的で、近未来的

なデザインでした。2個のキャブ

スタンのうち、巻取り側のキャブ

スタンの表面に特殊な表面処理を

施し、テープのテンションむらを

改善する仕組みを採用しており、

ワウ・フラッター値も良好でした。

また、日本製品としては初めて

テープの飽和現象を抑え、クリア

な録音が可能なシステムを搭載し

ていました。当時のカセットデッ

キにはカラフルなLEDレベル

メーターが装備されており、夜に

部屋の照明を消してLEDの光の

動きを見ながら音楽を聴くと、普

段とは違う雰囲気味わうことが

できました。

カセットテープにはさまざまな

磁性体が使われ、大きく4つのタ

イプが策定されました。1つ目は、

ノーマルテープと呼んでいた最も

基本的なノーマルポジションの

テープ。2つ目は、ハイポジション

と呼んでいたノーマルテープよ

り保磁力の大きな磁性体を使用す

るテープ。3つ目は、中低域は強

いものの高域が弱いノーマルポジ

シヨンと、逆に高域は伸びるもの  
の低域に弱いハイポジシヨンが持  
つそれぞれの弱点を補完する発想  
から生まれた重層構造のテープ。

そして、4つ目は、酸化されてい  
ない鉄合金などのメタル磁性体を  
使用し、メタルテープと呼ばれた  
もので、音質が良く高価格帯で販  
売されていました。当時は、アナ  
ログレコードやFMからテープに  
録音する機会が多く、ここぞとい  
う時にはこのメタルテープを使っ  
ていました。その中でも、ダイキャ  
ストフレームを用いて一般的な  
テープのハーフの2倍ほどの重量  
があるメタルテープなどは、本  
当に最高の音で残したいという時  
に使っていました。私と同じ世代  
の方は、同じような使い方をされ  
ていた方も多いのではないでしょ  
うか。

中学～高校時代にはFMラジオ  
を良く聴いており、エアチェック  
も行っていました。私が中学の時  
は民放のFM局は少なく、全国で  
5番目に開局した民放のFMを良  
く聞いていました。エアチェック  
という言葉自体、若い世代の方は  
ご存知ないかもしれませんが、当  
時学生でお金のない私がさまざま  
な音楽に出会い、曲全体を聞くた  
めの重要な方法でした。無線機で  
定評があったメーカーのチュー  
ナーを購入し、電波を安定して受

信するためのアンテナにもこだわ  
り、可能な限りノイズが少ない受  
信を目指していました。

また、79年のウォークマンの登  
場により、中学時代(80年代前半)  
に本格的なポータブルオーディオ  
の時代がやってきました。ウォー  
クマンは、カセットテープをステ  
レオ再生することに特化して小  
型・軽量化し、音楽を携帯して気  
軽に楽しむためのプレイヤーであ  
り、時代の流れを変える商品でし  
た。幾つかのモデルを愛用しまし  
たが、特に記憶に残っているのは、  
衝撃に強いABS樹脂素材の黄色  
のケースに、ラバーシールによる  
防水加工の操作ボタンが配置され  
たアウトドア用ウォークマンで、  
頑丈なギア感が気に入っていま  
した。

その他、アンプは全高調波歪率  
も低く、透明感のある音を奏でる  
プリメインアンプを、スピーカー  
はボイスコイルピンとダイヤフ  
ラムを一体化し、直接振動板を駆  
動する方式のスピーカーを愛用し  
ていました。また、映画鑑賞時な  
どにはポデイスニックサラウンド  
システムも使っていました。これ  
らの機器に出会うことで、本当に  
幸せな時間を過ごすことができ  
たと思います。

(2) デジタルオーディオ時代の

思い出の機器

1980年代初めに製品化され  
たCDの登場により、私が高校生  
の頃にオーディオ業界にデジタル  
化の波がやってきました。私は中  
学生の頃からオーディオマニア向  
けの雑誌を読んでいましたが、ま  
だ開発中のCDの仕組みやフォ  
ーマットに関する記事があり、食  
い入るように読んだことを記憶し  
ています。CDのサンプリング周  
波数や量子化ビット数などを解説  
した記事は、私の好奇心を強く刺  
激し、中学生ながら標本化定理な  
どを勉強し、早くCDの音を聞いて  
みたいと思っていました。時は流  
れ、高校生の時に買ってもらった  
CDプレイヤーで音を聴いた時の  
衝撃は今でも鮮明に覚えていま  
す。

CDプレイヤーでは、内蔵メモ  
リーで機械的動作の影響を排除で  
きるため、ワウフラッターは「測  
定限界以下」と表記することが一  
般的となりました。このCDの黎  
明期頃の高校時代(80年代中盤)  
に、CDを超えるデジタルオー  
ディオを考えたことがありまし  
た。その時のアイデアは、音楽デー  
タを再生の都度ディスクから読み  
出すのではなく、メモリーに保存  
したデータから再生する方法でし  
た。メモリープレイヤーができ  
れば、ディスクからのデータの読み  
出しエラーも無くなるという発想

でした。また、メモリーであれば  
CDを超えるサンプリング周波  
数、量子化ビット数でデータを保  
存することも可能であり、更に音  
質を向上させることができると考  
えていました。ただ、当時の80年  
代は、パソコンがようやく普及し  
始めた頃であり、メモリーの容量  
も非常に限られていました。

デジタルでの録音については  
DATが開発された後、使い勝手  
や価格面に優れたMDが開発され  
て、より手軽にデジタル録音がで  
きるようになりました。その後、  
さまざまな音声ファイルフォー  
マットとメモリープレイヤーが登  
場し、音楽を聴くスタイルの多様  
化が一気に進みました。そして、  
CDを上回る情報量を持つ高音質  
なハイレゾ音源も充実してしま  
した。また最近では、60年代から長  
い間親しまれてきた「ステレオ」  
から「空間オーディオ」への進化  
もみられ、低価格なシステムでも  
豊かな音場空間を感じることがで  
きる時代になってきました。現在、  
私はデスクトップパソコンに、マ  
ルチチャンネルインテグレートア  
ンプと4ウェイのバスレフ方式の  
スピーカーを組み合わせて大好き  
なジャズなどを聴いています。学  
生時代の機器構成から考えるとか  
なりシンプルな構成となりました  
が、高音質の音楽を気軽に楽しめ

る時代になりました。

(3) アナログ映像時代の

思い出の機器

これまでオーディオ機器につ  
いて述べてきましたが、ここからは  
映像機器との思い出をご紹介します  
と思います。

中学生の時に出会った思い出の  
映像機器は、家庭向けビデオテー  
プレコーダーのベータマックスで  
す。1970年度半ばに登場した  
ベータマックスは、アナログ映像  
時代の規格の一つであり、ビデオ  
カセットテープは2分の1インチ  
幅で文庫本サイズでした。当時  
使っていたビデオのリモコンは、  
ワイヤレスではなくコードで繋  
がったワイヤードタイプだったこ  
とが特に印象に残っています。好  
きなテレビ番組をテープに録画し  
て、好きな時に何度でも見るこ  
とができるという、これまでのライ  
フスタイルを変革する、夢のよう  
な機械に出会った瞬間でした。  
以降、FM変調したステレオ音  
声記録を行うBeta Hi-Fi  
やVHS Hi-Fiなどより音質  
面の向上は図られましたが、画質  
は大きく変化せず水平解像度は  
240本程度でした。また、当時  
の地上アナログ放送も水平解像度  
は330本程度でした。そのよう  
な時代に、レーザーディスクプレ  
イヤーを買ったと言う友人宅で映

像を見た際、その鮮明さにすっかり魅了され、本当に羨ましかったことを覚えています。このレーザーディスクは、LPレコード並みの直径約30cmの光ディスクにアナログ映像を圧縮なしで記録できるビデオディスク規格であり、光ディスクは未来を感じさせるものでした。その水平解像度は、300本後半から技術の進歩により向上していき400本程度を実現しました。その後、私もレーザーディスクプレイヤーを購入し、自宅で高画質な映画を堪能することができました。

1980年代後半からは水平解像度400本以上を達成したSVHSなどが登場し、アナログテープでも高解像度な映像を録画、再生できる時代がやってきました。また、映像を映し出すブラウン管テレビも、アパーチャゲリルのピッチ幅を狭めた製品などが登場し、高画質化していきま

80年代は、オーディオと映像の融合の黎明期であり、10代の興味津々な時期と重なったことは本当に幸せでした。

(4) デジタル映像時代の

思い出の機器

映像機器のデジタル化の波については、私が社会人になった後の90年代後半にやってきました。子

供が生まれる少し前に、家庭用デジタルビデオ規格の1つであるDV方式のビデオカメラを購入しました。このビデオカメラは、磁気ビデオカセットテープであるminiDVを使うもので、SD品質でしたが500本程度の水平解像度を実現していました。その後、海外へ行く機会が増え、当時の民生用ビデオカメラとしては業界最高のメガピクセルCCDを搭載したカメラで、数多くの絶景を記録してきました。

その後、2000年前後にはDVDが、2000年代後半にはブルーレイディスクが普及し始めることで一気に画質が向上しました。そして現在は、スマートフォンで気軽に4K映像を撮影できるようになっており、改めて技術の目覚ましい進歩を実感しています。

(5) おわりに

私が思い出に残る素晴らしい電子機器と出会うことができたのは、学生の私に多くの経験をさせてくれた親のおかげだと思っております。本当に感謝しております。また、私はここ20年以上、事業開発の仕事に携わっており、新しい事業やサービスを世の中に送り出すことがどんなに大変なことなのかを理解しているつもりです。これまでにご紹介した電子機器は、当

時の技術を駆使し、さまざまな試行錯誤の後、製品の形にして世の中に届けられたものであり、それらの機器を開発された方々にも心より感謝申し上げます。

今後もオーディオや映像の世界では新しい技術、機器が開発されると思いますが、心に残る機器と出会えることを楽しみにしております。

自身のコロナ禍を

振り返って

森田 洋  
(平9年卒・関西支部)



4年前の今頃には、感染症が全世界に広がって行動制限なんて起ころとは夢にも思っておりませんでした。この間、身の回りが大きく変化し、自分自身の生活もこれまでとは大きく違うものになりました。2023年5月8日の「5類移行」で一つの節目を迎えてから、初めての年末年始。自らの「コロナ禍」を振り返ってみました。

同窓生の一人の経験を綴った駄文ではありますが、皆様の「コロナ禍」と重ね合わせながらお読み頂ければと思います。

・コロナ初期

コロナウイルスの話題がニュースになりだしたのは2020年のお正月。京都にある自宅を離れ金沢で単身赴任中でした。私は鉄道会社に勤務しており、この頃は日々の列車の運行管理を担う部門で業務をしていました。2月初旬からは情報共有のための社内会議が頻繁に開催され、職場内外の感染防止対策や感染者が発生した場合の対応策の検討など、通常業務そっちのけでの対応が始まりました。

運行管理部門はチーム制で交替勤務しています。万一感染者が出ってしまった場合に、同じタイミング・空間で勤務している社員が濃厚接触者として指定されてしまうと、「健康観察」という名の隔離となり出社できなくなってしまうことから、バックアップ要員の確保、養成といった対応にも追われました。

特に当初は「濃厚接触者」の指定基準が不明確でしたので、他箇所の事例を情報収集し、患者発生時の濃厚接触者を最小限に抑えられるような執務環境の整備も含め様々な対策を検討し、2月末ごろ

には、「職場内でのマスク着用義務付け」「座席間隔の2m以上確保」「飛沫防止のためのパーティション設置」「休憩室や喫煙室の人数制限」などを行いました。パーティションについては、そのような用途の製品も市販されておらず、職場近くのホームセンターで角材とビニルシートを購入し、不恰好ではありますが、それぞれが小さなブースの中で執務するような環境となりました。また、飲み会の多い職場でしたが、3月末に開催した異動者の送別会が、私のコロナ禍前の最後の飲み会となり、これ以降は社員同士の飲食を伴う会合は禁止。社員間のコミュニケーションへの配慮が重要課題となりました。

2020年4月の緊急事態宣言の発出を受け、出社人数の制限、在宅勤務制度の開始、不急の出張や会議の中止などの対応がとられ、必要な会議についてはzoomの活用などが行われるようになりました。

1回目の緊急事態宣言は5月14日で解除となったものの、まだまだ安心できる状況ではなく、旅行の自粛やリモートワークの浸透などといったことで、鉄道のご利用が大幅に減少し、「一時帰休」が実施されたり、業務経費の更なる削減策検討という課題への対応を

したりと慌ただしく過ごしまし

仕事以外の生活面では本場に職  
場と寮の往復だけ。たまにスー  
パーに食料の買い出しといった生  
活となり、自宅への帰省について  
も、ちょうどこの年は子どもが受  
験を控え、あまり家に帰ってくる  
などの指示。それまでは月2〜3  
回の頻度で帰省していたのです  
が、回数を大幅に減らしました。

たまたまの帰省時には、列車の乗客が、  
その車両の中で一人きりというこ  
とも多く、いろいろな意味で心細  
かったことを思い出します。

受験という点では、コロナ前は  
多くの旅行者のため「受験の宿」  
の確保が困難でしたが、きつぶや  
宿の確保は容易で助かりました。  
特に宿は、今では考えられない安  
さであり、非常にラッキーでした。

・2回目の緊急事態宣言以降

2回目の緊急事態宣言は、  
2021年1月〜2月、3回目は  
4月〜6月と、感染状況に一喜一  
憂しながら過ごしていました。自  
粛疲れに伴う閉塞感のような雰  
囲気が漂い出し、特に職場内・職  
場間のコミュニケーションの確保  
には大変苦労しました。鉄道会社  
の業務は様々な職種で成り立っ  
ているため、例えば企画部門では  
リモートワークが適用できても、実  
際に現地設備を保守する部門に

ついてはそういうわけには行か  
ず、異常時の即応体制も含め、こ  
れまで通りの勤務形態を維持しな  
ければなりません。部署による業  
務スタイルの違いが際立つ中、そ  
れぞれが納得感を持って仕事をし  
てもらうために情報発信の強化や  
コミュニケーションの活性化を図  
る取組みも行ないました。

私自身は、3回目の緊急事態宣  
言中に大阪地区の企画部門へ異動  
となり、自宅から通勤できるよう  
になりました。前述した子どもの  
受験は無事終わり夫婦ふたりでの  
生活、家人も仕事をしているため、  
それぞれ平日昼間は仕事といった  
スタイルになりました。この頃、  
月に2回程度の一時帰休と週1回  
程度の在宅勤務といった勤務形態  
でした。一時帰休であっても時節  
柄どこかに外出するのも憚るため  
家に居ざるを得ない状況でした  
が、家人からすると一時帰休でも  
在宅勤務でも同じ感覚。在宅勤務  
日なのいろいろな家事を申しつけ  
られ、早々に勤務を切り上げ役所  
まわりをこなすなど、職場に出社  
している時よりも要領よく仕事を  
済ませるスキルが求められました。

・コロナ禍を経て変わったこと、  
変わらなかつたこと

やはり、元々、飲む機会の多い  
会社であったので、飲み会回数に

ついては5類移行後はコロナ前の水  
準に戻ったような気がします。た  
だ、遅くまで飲み歩くといったこ  
とは少なくなりました。元々私は  
飲めない体質なのですが、さらに  
お酒に弱くなったように思いま  
す。

職場については、継続してリ  
モートワークが認められている状  
況であり、各種ハードも整えられ  
たことから、より柔軟な働き方が  
できるようになりました。会議や  
打合せのために移動に長時間費や  
すようなことも減少。対面打合せ  
の密度も濃くなってきたように思  
います。

また、休暇の取得についても意  
識が変わってきたように思いま  
す。「体調が悪かったら出社しな  
くてよい」という価値観のよう  
なものが定着したこと、各種ツール  
でお互いの業務の状況が把握で  
き、バックアップできるような環  
境が整えられるようになってきた  
ことから、自身も含め、「無理し  
て出社しないと…」なんてこと考  
えなくても良いようになってきま  
した。

身の回りの状況については、京都  
の観光客の数は急速に以前の水準  
に戻りつつあるようです。バスや  
地下鉄はかなり混雑するようにな  
りました。自宅周囲はコロナ前か  
ら多くの民泊が立ち並んでいるの

ですが、夜中もスーツケースを転  
がして歩く音が響いています。近  
所のコンビニは、昔から留学生ア  
ルバイトの店員さんが多いので、  
夜中は店員さんもお客さんも海外  
の方ばかり。どこの国に来てし  
まったのだらうと思うような状態  
になってきています。

コロナ禍の最中には、京都の神  
社仏閣を極力観光客の少ない間に  
見て回ろうと思っていたのです  
が、もう時すでに遅しといった感  
じです。

この3年ほどを振り返りました  
が、本当に思ってもみなかった時  
代を生きたように思います。とは  
いえ幸い私自身や周囲の家族も健  
康被害等なく切り抜けることがで  
きました。まだコロナウイルスに  
気を緩めてはいけないのかもしれ  
ませんが、このようなパンデミッ  
クや災害、あるいは戦争といった  
ことがない世の中であって欲しい  
ものと思います。

ZEHで快適な家づくり

(その2)

菌田徹弥

(昭51年卒・九州支部)

させた家について述べていきま  
す。

・蓄電池の導入について

今回の既築家屋のZEH化に併  
せ、蓄電池（テスラ製  
13.5kWh）を導入しました。  
これによる効果は、①自家消費率  
の向上、②二十四時間停電対策等  
防災、であり、自家消費率が向上  
すれば、買電も売電も減少します。

・蓄電池ありの場合の

自家消費率について

蓄電池の導入により、自家消費  
率が39.5%から68%へと約  
三〇%高まりました。冬季、夏季  
の電気消費量の多い時期に自家消  
費率は高まりますが、三〇%の自  
家消費率の向上は、月当たり約  
四千四百円（注\*）の価値に相当  
します。年間で五万三千円、  
一〇年でも五十三万円相当になり  
ますが、保証期間の短い蓄電池は  
これよりもはるかに高価ですの  
で、現状では投資回収は困難に  
なっています。

注\* 月平均発電量の三〇%に  
買電単価と売電単価の差（二〇円  
想定）を積したものと  
・売電について

売電量は月平均二百五十七  
kWh、売電単価はFITで十九  
円/kWh（令和三年）であり、  
毎月約四九〇〇円の収入を得てい  
ます。

・買電について

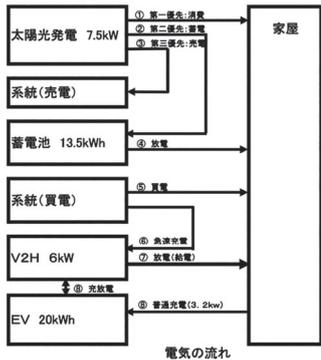
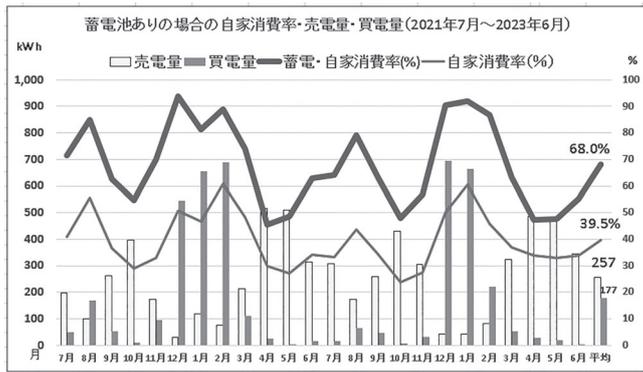
買電は月平均百七十七kWh、買電単価は約二十五円（基本料、省エネ賦課金、燃料費調整単価、消費税等全て含む）になりました。太陽発電パネル設置当初は大手電力会社と深夜電力の契約をしていましたが、その後早い機会に新電力へ契約変更し、冬季は時間変動のダイナミックプライシング（DP）契約、その他の期間はフラットプラン（FP、基本料なし二十五円/kWh、これに非化石証書、燃料費等調整額、再エネ賦課金の計約一〇円が加算）契約としました。令和四年は、総買電量二千二百七十六kWh、約六万円の請求がありました。

・経済性のシミュレーション

これまでのまとめとして、これから三十年をみたときに、年間九〇〇kWh発電とみなすと、  
・自家消費節約分：三百七十八万円（自家消費率約七〇％に買電と発電の単価差二〇円の積）  
・売電：一〇五・三万円（当初十年はFIT二〇円、残り二十年は一〇円と想定）  
・買電：二百十六万円（買電単価三〇円想定）

・収支差：二百六十七・三万円  
となります。EVでの節減は省

きました。これであれば、全体の中では蓄電池設備も賄えそうですが、今後の変動要素として、現在は三〇円としている買電単価の上昇、パネルの発電効率低減、パワコン等機器の交換費用などがありますので、あくまでこれらは一つの仮定とみるものです。



同窓会だより

66周年クラス会 昭和32年卒

一 洛友会と私たち

洛友会は昭和27年11月に鳥養先生を会長として発足し、昭和28年初から各地に支部が結成されて活動を開始しました。洛友会会報の第一号が8月に発刊されています。

会報の巻頭には会長挨拶として横の連携は同級生会が担い、洛友会は縦の連携協調を図って発展させていくと記されました。

私たち洛友32会はまさにこの時に入学し、洛友会と共に育って来て、初代会長のご意向を果たしてきたと自負しています。本年卒業66周年を迎えました。私たちの入学70周年が同じく洛友会活動開始70周年で、深い絆を感じています。

二 クラス会第一日

60周年記念クラス会で力強く踏み切り、ホップ（62周年）ステツプ（64周年）（以上既報）を経てジャンプして66周年クラス会を開催することにしました。ついにその時の到来です。令和5年10月25日。会場は京都駅八条口のホテルエルシエントです。12名の参加ですが、5名がご家族でクラスメイト

は7名に激減しました。多くの方から参加したいは山々なれど遠路の外出は難しいとの返信が来ました。加えて残念なことにこの66年間で22名の友を失いました。会場に物故者全員の写真を掲げました。黙祷をして在りし日の姿を偲び、共に今日を祝いました。次いで参加できなかった方の近況を報告し、また会える日を願いました。

宴が始まるとたちまち何十年ものタイムスリップです。賑やかな歓談が続きます。阪大電気との定期対抗戦の第一回が私たちで、京大電気野球チームのバッテリーとセカンドの3名がここに出席していました。3名とも強そうに見えません。阪大に負けた筈です。

この年になると健康の秘訣からお墓の処分まで話が広がります。有益な情報でした。

宴の最後は「洛友会の歌」を恒例としています。松田先生、大谷先生、洛友32会は歌い続けています。



洛友会の歌を高唱する66周年クラス会 於ホテルエルシエント 2023.10.25

三 クラス会第二日

爽やかな秋晴れの朝、京都御苑へ向かいました。京都迎賓館の参観を予約していました。京都迎賓館は平成17年に開館しました。鉄筋コンクリート造りの

筈ですが伝統的和風建築としか見えません。ホームページでは日本の伝統技能の粋を集めた最高のおもてなしの場と謳っています。窓から見える池を中心とする庭園も素晴らしいですが、次々に広がる部屋を特徴づける工芸品の装飾の見事さには息をのみませます。

ガイドの声がワイヤレスヘッドフォンで耳に届くのも難聴をかこつ高齢者には快適でした。90分の充実したツアーでした。

御苑から近い「くに荘」(久邇宮邸跡地の宮家ゆかりの場)でお別れの昼食会です。「洛友会の歌」の終章よりまた会う日まで強く生きなんつとを口ずさみながら散会しました。西台 惇 記

### 昭和44年入学者同期会を熱海で開催

昭和44年電気系学科入学者で毎年1回全体の集まりを11月7日-8日開催してきました。ここ数年はコロナ禍で全体で集まる会を控えていましたが、4年ぶりに熱海で開催しました。

当日と翌日の箱根と伊豆での希望者ゴルフを挟み、熱海「ホテルニューアカオ」での懇親会を呼び掛けたところ、19家族24名が集まり近況報告に花が咲きました。(写真) なかには卒業後半世紀たつて

始めて出席して顔を合わせるメンバーもいましたが、学生時代の思い出に話題尽きることなく遅くまで多岐の話題に花咲かせました。特に最近はお奥様の参加も増え、女子力パワーを痛感する会になったと思います。

来年は奈良、あるいは足を延ばして同期が活躍中の台湾で集まろうと元気な意見も飛び出て、お開きになりました。当日は天気もよく、この季節としては珍しく雪はなかったですが、霊峰富士の眺めや太平洋に上がる日の出も楽しめる会になりました。

幹事 福永泰、印藤公洋 記



### 昭和42年卒クラス会

令和5年12月1日にモントレ銀座で開催されたクラス会には18名の参加がありました。コロナ禍での4年ぶりの開催でしたが、皆元

気で再会することができました。まず、この間に亡くなった級友の冥福を祈りました。その後、皆さんの健康を祝い、乾杯しました。また、永年の功績や優れた行いで受章された2名の叙勲者を祝福しました。

その後、食事をしながら参加者全員が近況報告をしました。登山、ゴルフ、ウォーキング、株式投資など、ボケ防止法や健康法に関する各自の日常の活動について紹介がありました。席を移りながら、学生時代の思い出などについても話が盛り上がりました。

限られた時間はあつという間に過ぎ、最後に円陣を組んで「琵琶湖周航の歌」と「逍遙歌」を合唱し、来年の再会を約束して会を締めくくりました。

なお、この会には洛友会より補助金をいただいております。

來山 征士 記



### 支部だより

#### 第120回関西支部ゴルフ競技会報告

〈プレー状況〉

第120回関西支部ゴルフ競技会が令和5年10月21日(土) 武庫ノ台ゴルフコースにて開催されました。

当日はやや曇り空で時折強い風が吹き、一時的に小雨が降るといった天気となりましたが、アウトは伊藤氏(S34年卒)、インは平嶋氏(S38年卒)の始球式でプレーを開始し、合計21名(うちシニア8名)が最後まで楽しくプレーを続けました。

結果は以下のとおりです。(敬称略)

- 優勝 (シニアの部) 吉田 豊彦 (S56年卒)
  - 2位 大澤 靖治 (S44年卒)
  - 3位 松尾 茂 (S38年卒)
  - (一般の部)
  - 優勝 中山 正人 (H9年卒)
  - 2位 中野 信一 (H2年卒)
  - 3位 井上 智弘 (H24年卒)
- また参加者は以下のとおりです。(敬称略)
- S34 伊藤 俊一
  - S38 平嶋 正芳
  - 松尾 茂

S44	大澤 靖治
S49	西 亨
S53	阿部 正之
S56	美濃 由明
S63	吉田 豊彦
H2	中野 信一
H4	下田 一彦
H7	木谷 博昭
H9	中山 正人
H18	大和田 淳
H24	井上 智弘
H26	上田 弘貴
H27	依田 学樹
H30	喜多 謹仁
R1	河本 昌樹
R3	遠藤 紘矢

〈懇親会〉 プレー終了後、下田氏(H4年卒)の司会により、表彰式兼懇親会が開催されました。

懇親会では伊藤氏(S34年卒)の乾杯のご挨拶からはじまり、表彰式では、吉田氏(S56年卒)、中山氏(H9年卒)より優勝報告を頂くとともに、関西洛友会ならびにゴルフ競技会の更なる発展を期待するコメントを頂きました。

〈お知らせ〉 洛友会関西支部では同窓生の懇親を深める機会として毎年2回

(春・秋) にゴルフ競技会を開催してまいります。次回は令和6年5月18日(土)を予定しております。同期などお誘い頂くことで老若男女を問わず多数ご参加頂けることを心待ちにしております。

〈連絡先〉

下田 一彦(日4年卒)  
依田 学樹(日27年卒)  
連絡先 070-2452-2208(依田)  
yoda.satoki@cskansai-td.co.jp



第120回 関西洛友会ゴルフ競技会 参加者集合写真

### 関西支部見学会報告

洛友会関西支部では、会員相互の交流を目的として、令和5年11

月4日(土)に見学会を開催しました。従来の「家族見学会」を昨年度の支部運営体制の見直しに合わせて簡素化したもので、施設見学を中心とした、ご家族も同伴可能な休日イベントです。

当日は、爽やかな秋晴れかつ11月とは思えない暖かさで絶好の行楽日和の中、会員24名とご家族21名、計45名の方々がご参加され、大阪府池田市のカップヌードル・ミュージアム見学及びびがんど池田石橋苑での昼食会を行いました。

前半のカップヌードル・ミュージアムでは、全員でオリジナル・カップヌードル作りの体験イベントに参加しました。カップ外周にカラーペンで思い思いのデザインを施され、また自由に選べるスープと具材の組合せに悩まれつつ、個性的な世界に1つのオリジナル・カップヌードルを完成させました。賞味期限は1か月、皆様さぞ美味しく食されることと思います。その他、インスタントラーメンの生みの親である安藤百福氏の生い立ちや発明エピソードが分かるシアター、過去からのインスタントラーメンパッケージの展示等を楽しく閲覧し、『発想が凄い』『懐かしい』といった声が多く上がっております。

後半の昼食会は、庭園を見ながら



ら食事ができるお屋敷レストラン、びがんど池田石橋苑にて行いました。高野支部長(昭和63年卒)のご挨拶と高らかな乾杯のご発声により宴が開始され、美しい庭園と屏風を鑑賞しつつ美味しい料理を堪能し、あちこちで笑い声が上がる楽しいひと時で親交を深めました。最後に安東副支部長(昭和59年卒)からユーモアあふれる締めのご挨拶を頂き、散会となりました。

今回、昭和38年卒から平成21年卒まで、またご家族を含めますと下は4歳まで、幅広い世代の皆様にご参加頂け、大変和やかな雰囲気の中で有意義な交流を図ることができました。ご参加頂いた皆様には、この場をお借りして心より御礼申し上げます。

白土 紀明(平5年卒) 記



### 四国支部

### 「秋の見学会」報告



四国支部では毎年、支部の会員間の交流を深めることを目的に「秋の見学会」を開催しております。

2023年度は11月19日(日)に12名を集め、香川県小豆島を訪れました。

前日の荒れ模様で天候から打って変わって、穏やかな日和となったこの日、高松港から高速艇で小豆島に入った一行は、「世界で最も狭い海峡」(最狭部9.93m)としてギネス世界記録に認定された土測海峡を通り、小豆島八十八ヶ所霊場第54番札所の宝生院を訪れました。宝生院には、樹齢約1600年以上、「応神天皇の御手植えの木」とも伝えられる、特別天然記念物の「宝生院のシンパク(真柏)」があり、一行は、幹周囲16.9mの巨木であるシンパクの佇まい、またその歴史に思

いをいたしました。

続いて、一行は寒霞溪を訪れました。奇岩怪石の絶景に、秋には紅葉の錦が映えることで名高い寒霞溪ですが、小豆島で寒霞溪のような美しい地形が形成されたのは、小豆島が瀬戸内火山岩類の噴火の中心地で、大量の火山噴出物から形成されているためであり、基盤の約8000万年前の花崗岩類の上に、13000〜15000万年前に噴出した瀬戸内火山岩類が堆積した後、1000万年以上にわたる侵食を受けて形成されたものとのことで、一行は、長い歴史を経て形成された、岩と紅葉が織りなす見事な渓谷を堪能しました。

昼過ぎには、オリーブ公園に立ち寄り、たわわに実るオリーブ林や、その中でも現存する産業用オリーブとして日本最古といわれるオリーブ原木等を観光した後、マルキン醤油記念館に立ち寄り、小豆島での醤油づくりの歴史やその技術についても知見を深めました。

最後に、一行は、小豆島で唯一の新しい酒蔵、小豆島酒造に立ち寄りました。こちらは小さい酒蔵ではありますが、小豆島を愛し、伝統を守りながら、常に未来を見つめて、理想のお酒造りを追求しているとのこと、杜氏の方から

酒造りに関する説明をいただきながら、工場を見学し、試飲を行いました。

一行は、それぞれの訪問先で、歴史や文化、技術について学びながら、各々の近況を報告したり、意見を交換したりと親睦を深めました。

四国支部では、今後も引き続き、支部を盛り上げていけるよう、見学会を継続したいと考えております。支部総会も含め、多くのみなさまのご参加をいただければ幸いです。

※今回の2023年度「四国支部の見学会」は「学年クラス会・支部活動費等補助について」に基づく補助を受けて開催させていただきました。盛会のうちに終えることができ、厚く御礼申し上げます。

段上 玲浩 (平8年卒) 記

### 中国支部企業見学会報告

令和5年12月1日(金)、冬の訪れが感じられる中、10名の支部会員にご参加いただき、キリンビール株式会社岡山工場様および備前長船刀剣博物館を訪問しました。中国支部の企業見学会は令和元年以来4年ぶりということもあり、少し趣向を変え、観光要素も加え

て開催いたしました。

午前中はキリンビール株式会社岡山工場様の「キリン一番搾りおいしさ実感ツアー」に参加しました。工場見学では、まずガイドの方からキリンビール株式会社様の歴史、ビールの素材(麦芽、ホップ・水)についての説明の後、麦芽の試食もさせていただきました。麦の味の中に甘みもあり、ビールのうまみの元を感じることができました。続いて麦芽を煮込んで麦汁を作る工程では、濾過の際、最初に出てくる一番搾り麦汁とお湯を加えての二番搾り麦汁の飲み比べもさせていただきました。その後、発酵についてはイメージ映像も交えて説明していただき、最後には缶にビールを詰めるパッケージング工程を見学しました。

午後からは備前長船刀剣博物館を訪ねました。備前長船は古くから刀剣の産地であり、博物館では様々な名刀を見ることができ、当日は国宝「山鳥毛」が期間限定で展示されていました。上杉謙信・景勝親子の愛刀としても有名な太刀ですが、実際に間近で拝見しますと、造形の見事さもある事ながら、実際に戦場で使われたと考えられる刃こぼれもあり、歴史の重みも感じることができました。

ケージングされていく動きは大変興味深く、参加者からは質問が続く有意義な場となりました。工場見学後はビールの試飲をさせていただきますました。見学してきた内容を思い出しながら飲むと味わい深く、美味しくかつ楽しいツアーとなりました。

工場見学後は、お食事処あさひにて会食を行いました。久々の企業見学会で顔を合わせた支部会員もおり、懇親を深めることができました。

午後からは備前長船刀剣博物館を訪ねました。備前長船は古くから刀剣の産地であり、博物館では様々な名刀を見ることができ、当日は国宝「山鳥毛」が期間限定で展示されていました。上杉謙信・景勝親子の愛刀としても有名な太刀ですが、実際に間近で拝見しますと、造形の見事さもある事ながら、実際に戦場で使われたと考えられる刃こぼれもあり、歴史の重みも感じることができました。

今後も多く支部会員の皆様に参加していただける行事を企画し、活動を盛り上げて参りたいと思いますので、引き続きよろしくお願いたします。

伊藤 達理 (平22年卒) 記

特に、超高速(約1,200) 2,000本/分) かつ正確にパッ



### 訃報

新28	近藤 輝夫	5・1・6
昭33	馬場 俊晃	5・9・27
昭37	越智 幸好	5・10・10
昭42	別所 義夫	5・9・14

以上の方々がご逝去なさいました。謹んで哀悼の意を表します。

